

新潟県納税貯蓄組合総連合会 優秀賞

巡り巡る税金

新潟大学附属長岡中学校

三年 吉原 芳歌

ページュの小さな機械が祖父の耳に装着されていた。

「耳が悪いから、補聴器を付けたんだよ。」

最近の祖父は耳が遠くなっていた。話しかけても気づいてもらえないことも少なくはない。そんな祖父が音を聞きとりやすくなると聞いてなんだか嬉しさが込み上げてきた。一方で、補聴器はとも高額だとテレビで聞いたことを思い出した。本当にそうだとしたら、年金暮らしで生活することが一杯な祖父にそんなお金はないはずだ。尋ねてみると、「二十万円」という驚くような金額だった。祖父が補聴器を宝物のように扱う様子はイキイキしていたが、やはり負担が大きいのではないかと不安になった。

「税金の補助があるから全額払っているわけじゃないと思うよ。」

家に帰って祖父の補聴器の話をしてみると、母が教えてくれた。税金と聞くと、道路の整備や公共施設、教育など皆が必要とされているものに使われるイメージがある。補聴器など一部の対象者のための税制度もあるのだろうか。調べたところ、診療情報を提供することで医療費控除を受けることが

出来る制度が二〇一八年から始まったらしい。また、私の町では七月一日に補聴器の助成事業が始まったということが分かった。遠い存在だった税金がだんだん身近に感じられ、気づけば税金に興味を持つようになっていた。

そんな中、気づいたことがある。それは、身近な税制度が近年になって、様々な県や市で導入されているケースが増えていることだ。年々、より人々が税金を利用しやすいような制度へと変化していることで、経済的に困難な人でもより過ごしやすい環境に近づいているのではないだろうか。私は日々よりよいものへと変わり続ける税制度に驚いた。

私は普段、消費税の他に税金で社会貢献を出来ていない。まだ学生で大人に比べれば、納めている量は少ないように思う。確かに、私は微力ではない。時々、税金で助けられてばかりいる自分が後ろめたいと思うことがある。しかし、無力ではないはずだ。今は税金に助けられてもっているが、大人になったら社会の一員として税金を納めていきたいと思う。今度は、税金を納めることでもっと誰かを助けられる存在になりたい。

「情けは人のためならず」という言葉には続きがある。それは「巡り巡って己がため」だ。この言葉を母から教わり、今でも大切にしている。人に親切にしたことは、巡っていつかは自分のためになるという意味だ。私はこれからの社会が、もっと身近な人に寄り添えるものになってほしい。皆が経済的な格差関係なく、安心して生活出来たらいいと思う。そのために税金について一人一人が向き合い続け、助け合うことが大切だ。誰かを助けたなら、いつか自分も助けてもらえるのだから。

これからの税金は私達が担っていく。